

高齢化する帰国者の「学習機会」を考える

「サロンコース」の試みを通して

馬場 尚子

- 目次 1. はじめに
- 2. 高齢帰国者の「学習機会」のあり方を考える
- 3. 高齢帰国者への「学習機会」提供の試み
 - 3-1. 郡山市での「サロンコース」の試み
 - 3-2. 「サロンコース」の試行経過と結果
 - 3-3. 「サロンコース」今後の課題
- 4. まとめ

1. はじめに

1972年(S47)の日中国交回復後、「中国残留孤児」とその家族の永住帰国が初まって28年、そして、中国帰国者定着促進センター(以下、センター)が1984年(S59)に開設されて今年で16年目になる。センター開所当初2年間(1期~11期)は43.8才であったが、ここ2年間(54期~60期)の帰国孤児本人の平均年齢は56.5才となっている。ちなみに帰国孤児配偶者の平均年齢は、初期(1期~11期)では、43.9才であるのに対して、ここ2年は56.2才、特に男性配偶者の場合は58.1才という高齢になっている。

高齢化した孤児世代帰国者が各定着地で昨今の就職難の中、仕事に就くことはかなり困難なことだろう。また、孤児世代帰国者が、各定着地において自分にあった「学習機会」を得ることも難しくなっているのが現状である。それにより、ただでさえ行動範囲の狭くなりがちな高齢帰国者は、ますます社会との接触機会が少なくなり、引きこもりがちな生活を送る者も多い。

しかし、孤児世代帰国者が、次世代に夢を託すことを帰国の目的とし、自分自身の老後をただやり過ごすというのには、その年月は長すぎる時間である。彼らにとって日本での生活は、人生の締めくくりを行うライフステージと重なっているのだ。この時期の重要性を、今一度支援する側も考え直す必要がある。「高齢者」となった残留孤児世代(以下、「高齢帰国者」)の異文化の地での「適応」という

視点で、定着地での日本語学習、第二言語教育の意味、「学習機会」のあり方、そして支援のあり方を改めて考え直してみる必要がある。

2. 高齢帰国者の「学習機会」を考える

人生の中の「高齢期」とは、社会的地位や経済活動からの撤退、友人たちの死、自分自身の体力、記憶力など知力の衰え、生物学上、また社会生活の上からも失うものが多い「喪失」の時期と言われる。それに加え「高齢期」の「中国帰国者」は、日本に帰国することにより、自由に操れることは、長年中国で培ってきた生活スタイル、人間関係(家族、友人)、中国では活かした自分の技術、知識等の「喪失」を体験し、二重、三重のストレスを受けている状態にあることを忘れてはならないだろう。しかし、このような「高齢期」は、人生の発達課題¹として、「人生の再構築」や「過去に対する受容」という、人生の締めくくりの時期であると言われている。高齢帰国者にとってもこれは同様であろう。そもそも孤児本人にとっての帰国、そして永住は、「日本人」としての「過去に対する受容」のためであろう。また、その家族である配偶者にとっても、来日は大切な家族に対する支持の表明でもあり、家族がお互いの過去を受容した上で共に「人生の再構築」を行おうとする締めくくりの場でもあるのだ。その過程を応援し、できる限りそれが円滑に進行していくような環境づくりをすること、受け入れ側である我々がなすべき「補償」ではないだろうか。

それでは、彼らの生活環境の一つとなる「学習」の場をどのように考えていけばよいのか。引きこもりがちな高齢帰国者に対する支援が必要なことは、以前より各地で支援者から指摘されていたが、支援の理念も方法も確立されていないのが現状である。私たちは、今、高齢帰国者のニーズにあった「学習機会」の提供を支援の柱の一つと考え、その可能性を模索し始めたいと考えている。

それには、「学習機会」を「日本語を学ぶ教室」としての固定観念から脱皮し、日本で生き生きとした日常生活を送れるための、高齢帰国者の持つ条件に合った「学習機会」として、そのあり方を考えていかなければならないだろう。高齢者にと

¹ 山根(1998)「ハビガースト、エリクソン発達課題」『高齢者のヘルスアセスメント第2巻 - 生活活動のアセスメント』

って、記憶にたよる「学習」はかなり困難を伴うものである。まず、高齢帰国者が第二言語としての日本語を習得するには「限界」があるという前提に立つ必要がある。また、仕事や子育てが終わった高齢帰国者は、社会参加への動機も薄れがちとなり、学習や生活に対するニーズも潜在化しがちである。このように高齢帰国者の自尊感情の低下したパワーlessness（無力感）²状態を考えると、本人が自ら日本人との接触を求めたり、地域社会へ積極的に参入していくことを期待するのは難しい。とすれば、支援者は高齢帰国者の孤立化を防ぐために、人間関係（地域の日本人や帰国者同士など）を広げたり維持したりする場づくりや、地域社会との関係の調整や地域リソースの利用を促したりしながら、社会参加への動機を高めたり、日本での生活の中に生き甲斐を見いだせるような環境づくりを援助することが必要なこととなるであろう。そのような活動を通して高齢帰国者自身が、日本社会の中でパワーを取り戻していく過程を「学習」と捉えてよいのではないかと考える。

そのような「学習機会」をどのように作り得るのか、実践の中で模索していきこうと始めたのが本章で紹介する「サロンコース」の試みである。この試みはまだまだ、高齢帰国者の「学習機会」を考えるきっかけにすぎない。しかし、この試みの中から見えてきた問題、課題について考え、次の行動へとつなげていくことが、これから高齢帰国者の「学習機会」を考えるヒントとなればと期待する。

3. 高齢帰国者への「学習機会」提供の試み

3-1. 郡山市での「サロンコース」の試み

センターでは、センター講師が中心となり99年度に「遠隔学習支援研究会」を立ち上げ、学習リソースから遠隔地にある学習者や支援者を支援するプロジェクトを実施した（これは、同年度の国立国語研究所の研究委嘱を受けている）。そのうちのひとつとして福島県郡山市の福島県中国帰国者自立研修センター（以下福島センター）と共同して、高齢帰国者を対象とした「サロンコース」を試験的に実施した。本コースは、所沢センターのスタッフと福島センターのスタッフの他に、郡山地域のボランティア協力者の参加を得、1999年8月から2000年の3月まで

² 久木田（1998）「エンパワーメントとは何か」『現代のエスプリ376 - エンパワーメント』

行われた。

福島センターは一般研修、再研修と帰国者に対する「日本語学習」の場を提供し続けている。再研修においては、運転免許コースなど、定着1年以上の帰国者のニーズに合わせたコースを開き、2,3世を中心に多くの学習者を集めている。しかし、「日本語学習」への明確な意欲とニーズを持つ者に対する内容、活動を優先せざるを得ない情勢では、高齢帰国者は参加が難しいという現実もある。これは、福島センターに限らず、どこのセンター、地域の日本語教室でも言えることだろう。福島の再研修の講師であったYさんは、再研修にも何回か顔は見せたけれども、結局は止めてしまった高齢帰国者たちの引きこもりや、50代からの職探しに困難を感じ、焦りの見られる高齢帰国者をみながら、そのような人たちの居場所の必要を常々感じていた。そして、今回の共同プロジェクトとして、高齢帰国者の自己表現の場、日本人や日本社会とのつながりを作る場としての「サロンコース」を試行してみようということになった。私たちは、あくまでもこの「サロンコース」を、高齢帰国者が異文化の地である日本で適応していくための第二言語教育の一環として捉えた。つまり、この「サロンコース」が高齢帰国者の単なる「逃げ場」として本人からも周囲からも捉えられるのではなく、社会的存在として自らを認識でき、より積極的に日本社会に関わる意欲を持つという「自立」の感覚を促進するものであるという観点に立ったつもりである。そしてそのような場となり得るように目標や活動のあり方を考えた（資料1「サロンコース（仮称）案」）。

試行に際して、まずは試みということもあり、学習者（本コースの性格から以下学習者は「参加者」と記すことにする）の幅広い公募は行わず、Yさんの思い当たる範囲での声かけを行い、3名の参加希望者を得た。3名は、孤児本人67歳の女性Mさん、Mさんの夫である孤児配偶者66歳Nさん、そして、婦人2世51歳の男性Uさんである。3人とも帰国およそ3年である。Mさんは、ごく日常的な日本語のやりとりは可能だが、Nさん、Uさんは身近な話題でも日本語のやりとりはかなり難しい状態であり、当初日本語を使うことに対して抵抗があった。郡山には帰国者の集住団地が2カ所あり、MN夫妻、Uさんは別々の集住団地に居住していた。いずれも外出の機会は滅多になく、通院や買い物、散歩程度、職探しをしているUさんは時々役所や職安に行く程度という状況であっ

た。団地内の人間関係も日本人の親しい知り合いはなく、帰国者仲間ですぐ行き来する程度のものであった。余暇活動に関しては、Mさんの趣味は中国でも家庭内で行うものが多く、日本でも家庭内で一人で行える裁縫や園芸は続けていた。Nさんは、中国ではかなり活動的な人であったようだ。趣味も広く、人間関係も幅広かったが、日本に来てかなりその範囲は狭まったようだ。今は、一人でもできる趣味（釣りや園芸等）は続けている。一日の多くの時間を、Mさんはテレビ、Nさんは中国のビデオを見て過ごしているとのことだった。Uさんは、中国では友人との交流や専門の漢方の学習や趣味を楽しんでいたようだが、日本に来てからは、日本語を自習したり、たまに中国の知り合いと将棋を楽しんだりという程度であった。

このように、この3人は日本人や、日本社会との接触機会がほとんどない状態であった。しかし、日本人との交流への期待や日本人の友人が欲しいという願望は持ち続けていたという。ただ、日本語ということばの壁が大きく、そのような希望の実現に対してはかなり諦めが支配しているようだった。そこで、「サロンコース」では、帰国者の日本での「自己表現」の場づくりを一つの目標と設定した。「自己表現」の手段は問わず、例えば、中国語を用いて、自分の趣味や特技を紹介するというような活動を通して日本人と場を共有すること、気楽に交流を体験することのできる場であることを目指した。そして、まずは、帰国者の「自己表現」「自己開示」を受け入れ、相互に交流することの可能性の高い相手として、中国語のできる、或いは、中国や帰国者に関心を持っている日本人の人材を開拓することを考えた。そして、Yさんを通じて郡山の日中友好協会の協力を得、協会員の中でこの「サロンコース」の趣旨に賛同し、コース参加を希望してくれた方々との交流から活動は始まった。

日本人の参加者はこの他に、中国語が堪能であり、かつ「サロンコース」の設計の協力者としても活動してくれたSさん、帰国者2世で福島センターの講師でもあるKさん、このコースのコーディネーター役であるYさん、そして、所沢からは筆者が加わった。

コースは、月1回のペース（帰国者の参加者の希望により）で、全8回行われた。活動の詳しい内容については、資料2（「『サロンコース』実施概要」）を参照されたい。次節では、その大まかな経過を紹介し、この章の最後の節では試行を

通して見えてきた今後の課題についてまとめる。

3-2. 「サロンコース」の試行経過と結果

今回の試行では、第3回目の料理講習会と最終回の後に、筆記によるアンケートを行った（資料3）。3回目後の帰国者に対するアンケート結果の概要は以下のものであった。会に参加した全体の感想としては、Mさん、Nさんは、5段階評価の2位「楽しかった」、Uさんは最高位の「とても楽しかった」と評価しており、「活動を通してどんな発見があったか」の質問には、Mさん、Nさんは「日本人との交流が持ててよかった・自分の技術や知識が役に立って嬉しかった・日本人の興味が少しわかった・知り合いができて嬉しかった」Uさんは、「日本人との交流が持ててよかった・自分の知識や技術が役に立って嬉しかった・知り合いができて嬉しかった」と答えていた。また、「今後の『サロンコース』でどんなことをやってみたいか」の質問に、Mさんは「自分と共通の趣味を持つ日本人と一緒に活動してみたい・中国語のできる人と話してみたい・自分のことを表現する日本語をもう少し勉強したい（自分のペースにあった方法で）」、Nさんは「自分と共通の趣味を持つ日本人と一緒に活動してみたい・中国語のできる人と話してみたい・日本人の同年代の人たちがどんなところでどんな楽しみを見つけているか知りたい」、Uさんは、「自分と共通の趣味を持つ日本人と一緒に活動してみたい・中国語のできる人と話してみたい」と答えていた。

一方、日本人の参加者10名に対するアンケート結果を見ると、「今日の会に参加してどうだったか」の問いに対し、5段階評価の1位「とても楽しかった」が7名、2位「楽しかった」2名、3位「まあまあ楽しかった」が1名であった。日本人の参加者は、日中友好協会の呼びかけにより集まった人が多かったせいか中国人と接した経験のある者が10名中7名と多かったが、中国帰国者について知る者は少なく、「実際に知り合いがいる」は2名、「帰国者関係の本を読んだことがある程度」が2名、「テレビや新聞で見る程度」が6名と、ほとんどの参加者が帰国者との接触は初めてであった。そして、「今後中国帰国者との交流をしてみたいか」に対しては4つの選択肢の内、「是非してみたい」「ちょっと難しい」にチェックした者はいなかったが、「都合がつけばしてみたい」が3名、「企画によって参加してみたい」が7名と、活動の内容によっては参加希望が得られそうであ

った。記述式感想の中には「中国語はわかりませんが、聞いているとわかるような気になってきます」というような感想や「いろいろな技術や能力を持っている方が活躍できる場があると良いと思います」「とてもおいしかった、また、中国料理を教えていただきたいです」といった好意的な感想が多かった。この3回目の料理講習会は、日中友好協会の年中行事として計画されていたものを「サロンコース」の活動として組み込む形を取った。これは、2回目のサロンコースに参加してくれた協会員がNさんの話を聞き、是非講師として参加して欲しいと申し入れてきたもので、地域の主に主婦を対象に帰国者3人それぞれに自分の得意分野での知識や技能を披露する場となった。もともとNさんもUさんも漢方に興味があり、その技術を活かしたいと初回から言っていただけに、この機会は、日本に帰国して初めての大きな舞台であったとも言える。このような行事的な機会は日常的に作ることは難しいかもしれないが、帰国者の参加者にとっては、自己表現できた、自分の技能や知識が日本人の興味関心を引いた、役に立った、日本人参加者にも満足してもらえたというような、達成感、充実感が得られたのではないかと思う。しかし、好意的な感想をくれた地域の参加者との出会いを、その後につなげていくという工夫ができなかったのは残念であった。

4回目以降は帰国者のアンケート結果にあった「自分と共通の趣味を持つ日本人と一緒に活動をしてみたい」に焦点を当て、団地近辺の公民館活動に参加する糸口を見つけるために、公民館から取り寄せた資料を見たり、実際に見学して参加したりした。実際の参加活動は「サロンコース」以外の時間に行われ、UさんにはSさんが同行し、Mさん、Nさんには日中友好協会のEさん（第2回目のサロンコースから参加してくれ、その後も積極的に参加を続けてくれた）が同行してくれた。結果的には、UさんはSさんの同行を得て公民館のサークル活動である「中国拳法」に参加し、3回目からは自力で参加するようになった。また、Nさんの特技である「香功」（中国の「気功」の一種）講座をNさんの住む地域の公民館で開講できないか、その可能性を聞きに出向いたが、公民館側の事情、地域の事情などで実現はできなかった。この詳細については次節で触れることとする。

最終アンケートの結果では、Mさん、Nさんは「友人たちと各国の文化等についていろいろ話げできたことがおもしろかった」、Uさんは、「サロンコースで自分の経歴やいろんな話をできたことが楽しかった」と答えている。また、「コース

参加して得るものはあったか」の質問には、3人とも「いろいろあった」と答え、Mさん、Nさんは「友好感情が深まり、風土や人情などについて理解できた」、Uさんは「簡単な日本語でのやりとりができた、日本社会の知識と経験が得られた」と答えている。また、「サロンコース」参加を通じて「日本人と交流できるという自信がついたか、また、自分自身を表現する機会を得られたか」については、3人とも3段階の最高位の自己評価をしていた。このように今回の「サロンコース」の試みに対しては、3人からは肯定的な答えが返ってきた。しかし、「高齢の帰国者にとって地域社会との関わりの場は必要だと思いますか」の問いに対して（複数回答可）Mさん、Nさんは「できればあった方がいい」としながら「家族間の行き来があればそれ以外にはあまり必要ではない」にもチェックしていた。Uさんは「是非あった方がいい」と答えつつも「中国語のできる少数の日本人とのつきあいができればそれでいい」と答えていた。今回、試行錯誤の活動の中で、自己表現の機会、日本人とのふれあいの機会を得たという実感はあったようだが、地域社会の一員としての実感や社会参加できるという実感にはつながっておらず、まだ、地域との関わりに対し消極的な面も感じられた。これは、活動が日常化していないということや、やはり「自分の日本語では…」という「ことば」の壁の問題、年齢的な問題などからくる「諦め」が根深くあるのではないかと思われる。

そして、「地域の日本人との交流にはどんな要素が必要か」との問いに対しては、Mさん、Nさんは「自分の興味のある趣味の場や交流の場に、日本人もしくは、中国語のできる日本人が誘ってくれたら可能」、Uさんは、Mさん、Nさんと同様の答えに加えて「隣近所の人と仲良くなるきっかけがあれば可能」と答えていた。いずれも、自らその機会を作り出したり、自分から飛び込んで行くことは難しいと感じているようである。そして、「高齢化する帰国者が日本の生活に必要なものは何だと思いますか」には、Mさん、Nさんは「地域の中国人や帰国者が集まる場・自分の趣味や学習したいことが行える場・中国の様々な情報・家族以外の人で中国語で自分の気持ちを話せる相談相手・近所の日本人の友人・自分の技術や知識を生かせる場」、Uさんは「自分の趣味や学習したいことが行える場・家族以外の人で中国語で自分の気持ちを話せる相談相手・自分の技術や知識を生かせる場」と答え、3人とも人間関係の豊かさや、自分自身の興味を満たす場、中国時代から持っている自分の力を生かす場等が、高齢帰国者にとって必要なことと考

えている。最後に、今後希望する活動として3人から出されたものは、「日本人との交流会・中国文化や自分の特技を紹介する活動・日本人に日本の文化や習慣を紹介してもらう活動・生活に必要な、または日本人との交流に使える簡単な日本語学習」という希望であった。そして、Nさんより、今回のコースに対して改善すべき点として「コースの活動内容の多様性が少なかった、交流の範囲が広がらなかった、今後はこの点の改善が望まれる」という感想記述があった。確かに今回はバラエティに富んだ活動を展開するというよりも、帰国者と相談をしながらどんな活動が実現可能かを模索していた時間が多かったかもしれない。ただ、その模索のための活動を通じて、サロンコースに参加した帰国者と地域日本人との関係は近づいたと思う。EさんはMさん、Nさんの近所ということもあり活動の場所への送り迎えをかって出てくれたり、MN夫妻がEさんやSさんYさんを家に招いたり「サロンコース」以外のつきあいも生まれた。また、Sさんは、Uさんとともに公民館のサークル活動の一つとして行われている中国拳法と一緒に参加し、この間、Uさんの自宅を何回か訪問したりして信頼関係を深めていた。

3-3. 「サロンコース」今後の課題

参加者（帰国者と地域住民）の広がり

今回の試行の結果として、帰国者の参加者からの感想にもあったように、日本人参加者の広がりに限界があった。特に、まずは中国語でコミュニケーションできる相手が欲しいという帰国者のニーズに応えることができず残念であった。今回はほとんど、コーディネーター役であったYさんの人脈に負うところが多かったため、今後は、広く一般に参加を呼びかけ、広報や、関係諸機関（中国語話者育成に関わる大学や専門学校、グループ等）への直接的な呼びかけを行ってみても良いだろう。また、中国語のできない日本人も隣人としての参加が望まれ、地域社会の日本人参加者の輪も広げる必要がある。そして、なにより帰国者の参加者を増やしていくことが課題である。今回参加した帰国者の知り合いへの呼びかけ、また、帰国者集住団地内での呼びかけ等、隠れがちな高齢帰国者の学習或いは交流ニーズの発掘を行う必要がある。

帰国者と地域の実情にあった活動の工夫

今回は、初めての試みということと、参加者も少なかったこともあり、活動の多様性と継続性という点で中途半端な結果に終わったものもあった。これは、支援する側にとっても初めて接する地域社会の実情や、高齢帰国者の現実が見えてきた過程でもあった。

3回目の薬膳料理講習会については、形式としても整っていたし、帰国者の役割もはっきりしていたので、参加者双方に達成感が持てたようであるが、このような一種のイベントでの講師的な活動というのは恒常的に作り出すことは難しい。機会を捉えて、「サロンコース」の活動に取り込んでいくということができるが、これを毎回の活動とすることはできないだろう。従って、コースの内容を帰国者の日常生活、或いは帰国者の居住地域での活動に結びつけていく可能性を探っていく必要がある。

また、経済的に決して余裕があるとは言えない帰国者家庭においては、活動を行うためにもなるべく経済的負担のない途を探さなくてはならない。公共的なサービス機関である公民館の利用を考えたのもそのためだが、公民館が主催する講座は不定期であったり、日本語力がある程度以上必要となるものであったり、なかなか参加可能で帰国者の興味を引くものがなかった。公民館で、日常的なサークル活動として同好会的に行われているものの中には、帰国者の興味を引くものもあり、サークルの人々も快く受け入れてはくれたが、Nさんの場合は、2回の参加後、月1500円の参加費が払えない、夫婦で参加すれば3000円もかかりこれは1週間分の食費に当たるという理由で参加を止めている。活動もサークルの雰囲気も気に入り、週1回の中国拳法の活動に積極的に参加して、楽しそうに続けていたUさんでさえ、サロンコース終了時には、職もなく経済的に苦しい立場の自分が、月1500円の参加費を払い続けることはできないと、あと1ヶ月ぐらいで止めるということだった。

また、高齢帰国者にとっては、「サロンコース」のペースも、学習者にあった条件にすることが必要である。交通機関を利用して家から距離のある場所に集合して行う活動は、あまり頻繁すぎても負担になるだろう。このような要素を考慮合わせ、今後も、地域の資源を発掘しながら、帰国者・日本人参加者の持つ条件に合った現実的な活動の内容を考えて行く必要がある。

地域の社会教育部門や市民グループ等との連携

今回、帰国者の地元での交流を広げるために、帰国者の居住地域の公民館を訪れたが、ここで一つの地域事情をかいま見ることができた。まず、帰国者などが一般に居住する公営住宅が地域から浮いているという実状だ。これは、地域によって事情は異なるかも知れないが、古くからの住人が住む地域と出入りの激しい公営住宅とでは、地域サービス機関としての公民館等の利用に差があり、公民館側からも、積極的な参加の得られない公営住宅の居住者に対しては、公民館よりも、団地内の集会所などで独自の活動をする方がよいのではないかと、という反応があった。また、公民館の利用は古くからの関係者が優先され、人の集まる保障のない新しい企画や新しい講師を採用することは敬遠される傾向にあることも察せられた。こうした状況を一朝一夕に変えることは難しいだろうが、一般の日本人にとっては、長期的に住む場ではないかもしれない公営住宅も、特に高齢帰国者にとっては終の棲家になる可能性が高い。帰国者が地域社会から「隔離」されてしまうことを防ぐためには、やはりこうした公的施設や社会教育関係機関、市民グループ、あるいは団地の自治会などとの連携を模索し、帰国者支援の足場作りをして行かねばならないだろう。

参加者のコミュニケーションに対する意識の変容

帰国者、日本人参加者両者に言えることであるが、「ことば」ができなければ人とのコミュニケーションや交流はできないというピリーフを、最後まで持ち続けていた部分があったように感じる。確かに高齢帰国者の日本語の習得には「限界」がある。特に職もなく近隣とのつきあいもなく孤立しがちな高齢帰国者にとっては進歩はもちろん、身につけた日本語の維持も困難な場合が多い。しかし、そうした「限界」を前提として、そこから可能性を探る姿勢が双方になれば、交流は生まれぬ。今後は、不完全な媒介語であっても、片言の日本語、(日本人側は)片言の中国語でも使えれば使い、言語以外の手段も用いながら自分の言いたいことや相手の言わんとすることを理解し合う交流や、娯楽や趣味の具体的活動を通してコミュニケーションに対する達成感の持てるようなものを工夫する必要がある。もちろん、コミュニケーション＝「ことば」と保守的になりがちな高齢者本人に対しても、日本人の参加者の世代の幅を広げながら、柔軟なコミュニケーシ

ョンに対する姿勢や様々なコミュニケーションパターンを相互に学習することで、「ことば」中心のコミュニケーション観に対する意識の変容や、日本語をマスターしていないと何もできないというような思いこみ、諦めを多少なりとも軽くしていける試みをしていければと思う。

地域のコーディネーターの必要

最後になったが、これが一番重要な課題であろう。それは、地域の日本人の高齢帰国者に対する理解を促進し、根気強く地域とのつながりを作っていこうという意志を持つコーディネーターの存在である。今回はYさんという優れた行動的なコーディネーターを得ることで、人脈の発掘や柔軟な活動の企画を行うことができたと思う。「サロンコース」の試行終了後も、今後も中国語が堪能で地域に密着して在日外国人の支援をライフワークとして捉えるSさんや、帰国者事情に詳しいKさん、Yさんの後任であるZさん、地域とのパイプ役であるEさんが今回の活動を受け継ぎ、継続していくことができるようになったが、高齢帰国者の潜在的ニーズを掘り起こしたり、地域の資源を発掘してネットワークを結んで行くには、コーディネーターの資質として広い視野と柔軟な発想、そして行動力が求められる。また、それを支える時間と経費もかかる。これは、個人的なボランティアのレベルでは抱えきれない仕事である。帰国者支援や国際交流、社会教育に関わる公的機関が孤立しがちな高齢帰国者の存在を地域の問題として捉え、そのような帰国者と地域を結ぶコーディネーターの必要性を認識していくことが必要であろう。

4. まとめ

今後、高齢帰国者の学習支援を考えていくためには、受け入れ側である日本社会の中で高齢帰国者に対する支援理念についてのコンセンサスが必要であろう。そして、これを考えて行くためには、高齢帰国者にとっての「自立」とは何かも考えていく必要がある。従来の「経済的自立」中心の「自立」の概念では、高齢帰国者を日本で「自立」させることは困難である。経済活動には参加が困難であり、「日本語」という社会での自立に必要なとされる道具を得ることも困難な高齢帰国者にとっての「自立」の概念を再定義する必要があるだろう。

また、高齢帰国者の学習支援を考えると、「日本語教育」の分野に限らない幅広い分野の知見が必要である。まずは、発達心理学や社会学、精神医学等の分野から日本における高齢帰国者のおかれている状況や特徴を分析、理解することが必要であろう。そして、支援の方法としても、「個人と環境との適合を図るためにはその個人をとりまく環境の諸要因（社会環境、社会体系など）への働きかけと変革」を重視するというコミュニティ心理学的アプローチや、社会教育における生涯学習、特に高齢者教育のあり方についての知見を参考としたい。また、昨今様々な分野で言われているエンパワーメント³の発想も、理念の根幹を作る発想の一つとなり得るだろう。

そして、最後になるが、この支援理念を考えていくためには、高齢帰国者自身の声や、学習支援の実態、地域の事情をもっと知る必要がある。「サロンコース」の試みはその実態と可能性を知る第一歩であったが、今後は、更に幅広くいろいろな地域で様々なタイプの高齢帰国者に対する学習支援の実態把握や、高齢帰国者が持つニーズを調査する必要がある。これらの調査によって得られたデータは、今後の支援を考え、実際に支援を試みる上で有効なヒントになるだろう。しかし、実際に支援を試みてみようとするときには、あくまでも帰国者が居住する地域で、その地域の支援者の手で状況分析を行うことが望まれる。なぜなら、その地域の帰国者一人一人の特性、地域にある学習資源の組み合わせにより、その「学習機会」のありかたは様々であるからである。より、実現可能な「学習機会」を生み出すためにも各地域で、その地域の事情に精通している人が関わり、高齢帰国者への支援の試みの蓄積がなされることを願う。

参考・引用文献

- ・山根信子（1998）『高齢者のヘルスアセスメント第2巻 - 生活活動のアセスメント』中央法規
- ・横山政子（2000）「帰国を巡る事情」、『「中国帰国者」の生活社会』行路社
- ・安場 淳（1998）「学習困難な中国帰国者の日本語をはじめとする生活ニーズ」

³エンパワーメントとは「社会的に差別や搾取を受けたり、自らコントロールしていく力を奪われた人々が、そのコントロールを取り戻すプロセス」を意味する。久木田（1998）

『中国帰国者定着促進センター紀要』第6号

- ・麻生 誠（1993）『放送大学教材 - 生涯発達と生涯学習』放送大学教育振興会
- ・山本和郎他（1995）『臨床コミュニティ心理学』ミネルヴァ書房
- ・佐藤恵美子他（1997）「『再研修』および『再研修』カリキュラム設計についての考え方」『中国帰国者定着促進センター紀要』第5号
- ・小林悦夫（1993）「第2言語教育の課題」『中国帰国者定着促進センター紀要』第1号
- ・久木田 純（1998）「エンパワーメントとは何か」『現代のエスプリ376 - エンパワーメント』至文堂
- ・吉田 亨（1998）「健康とエンパワーメント」『現代のエスプリ376 - エンパワーメント』至文堂
- ・箕口雅博（1998）「中国帰国者へのコミュニティ心理学的接近」『現代のエスプリ377 - 多文化時代のカウンセリング』至文堂
- ・中野謙二（1997）『中国の社会構造 近代化による受容』大修書店
- ・I・ロツソー（1983）『高齢者の社会学』早稲田大学出版部
- ・荻野薫子他（1992）『熟年からの心と体の健康学』中央法規出版
- ・E・H・エリクソン他（1997）『老年期』みすず書房
- ・遠藤辰雄（1981）『アイデンティティの心理学』ナカニシヤ出版
- ・江畑敬介（1996）『移住と適応』日本評論社

資料

（資料1）「サロンコース（仮称）」案

1. 対象者

主に50代以上の残留孤児世代の帰国者。中国では一社会人としての社会的立場を持ち、自己表現をしてきたが、来日後、年齢的にも日本語力がなかなか進歩せず、家に閉じこもりがちの中で、地域社会の一成員、成人としての自己表現の場や人間関係を広げて行く機会を自らの力だけでは得にくい状態の者。また、そのような生活の中で現在の生活に不快感を持つ者。

ただ、不快感が心理的に「不適応」状態になってしまっても「治療」が必要なような人の場合は、それをリファーマ（委託）する先を考えることが必要になってくる。このよ

うな帰国者はコースの中心の対象者として設定しない。

2. サロンコースの目的（参加者にとってのサロンコースの意味）

日本社会や日本人とのつながりや関わりを生み出すコースであること

（自分自身の存在意義を社会の中で確認できること）

少しでも自尊感情を高めることができるコースであること

（より自分らしくあること）

異文化との折り合いのつけ方を学ぶコースであること / 自分なりに異文化の地で「楽しみ」「生き甲斐」を見つける方法を学ぶコースであること

（日本で生活し続ける上で、母文化との調整の付け方を学べるものであること）

3. サロンコースの課題（役割）

帰国者が自己表現したり、自分の興味や関心に沿った活動ができる場を提供する

帰国者に人間関係を広げる機会を提供する

帰国者の日常的な不全感が多少なりとも軽減される（より自分らしくいられる体験ができる活動の機会を提供する

参加する帰国者、日本人双方に同じ趣味や興味を持つ者同士なら、楽しく時を過ごすという体験を持ってもらう

4. 「3」を満たすための具体的な活動の条件（帰国者の立場で考えられること）

中国語を使える場であること（少なくとも日本語は強要しない）

教師对学习者の「教室」的空間ではなく、帰国者と日本人とが自然に接触でき日常生活にも持ち込めるような活動形態をとること

中国での自分の経験（仕事・趣味など）の知識や技能が利用できる活動であること

自分の趣味特技がなくても、日本での自分探しができるような活動であること（与えられるものをこなすのではなく、自分の興味を優先しながら選択できる活動）

活動参加が義務的なものではなく、楽しい気分で参加できること

5. 主な活動内容

サロンコースの場で、帰国者と中国語のできる（或いは中国や帰国者に興味を持つ）日本人が共通の興味関心、趣味などで語り合ったり、活動したりする。そして、同じ趣味を持つ者や、親しくなった者同士で、積極的に教室外で趣味活動や交流活動を行うように促進する。その課外活動もコースの一環と考える。できれば活動が日常的なものに移行していくような流れを目指す。

6. 基本メンバー

帰国者参加者

日本人参加者

コーディネーター

7. コーディネーターの役割

コーディネーターは、定期的な交流活動が円滑に進むように、帰国者側の準備を手伝ったり、アドバイスをしたりする。また、日本人参加者に対する趣旨説明（以下、「日本人参加者の役割」参照）を行い、帰国者が地域の趣味的活動に参加できるように橋渡しをしてもらえるよう、各ペアの動向を見守り、アドバイスする

8. 日本人参加者の役割

帰国者の置かれている状況（日本語が思うようにあやつれないことで人間関係の広がりや社会参加、余暇活動の範囲が狭められているという現実）を理解し、積極的な関わろうとする姿勢を持つ（中国語を使ったコミュニケーションも受け入れる。必要があれば通訳を介してのやりとりもある）

帰国者が、自分の趣味、興味関心について表現することを受け止め、共通の趣味がある場合は地域で趣味活動を一緒に楽しむ（コーディネーターは同じ興味関心を持っている日本人を捜せれば望ましい）

帰国者の趣味、興味関心がもてることと地域の活動を結びつけて、帰国者を外へ引き出すように働きかける（公民館活動など、地域に幅広く活動場所を求める）

9. 活動ペース

定期的活動回数と時間：参加者と相談の上決定、余り頻繁でなくとも良い（月に1回2時間程度）

活動場所：費用の余りかからない公共の施設等

10. コース開始に当たって事前に確認しておくこと

帰国者・日本人参加者に「サロンコース」の趣旨説明とそれぞれにとってのコース参加の目的、役割を確認しておく

参加者へ自分のプロフィールに関するアンケート（日本人参加者向け、帰国者参加者向けは別内容）を実施する。（日本人向けには中国語力や中国や帰国者への関心領域、質問の共通部分としては連絡先、年齢、趣味、興味関心のあること、やってみたいこと、体験してみたいこと等）

(資料2)「サロンコース」実施概要

(1999.8~2000.3:3回目を除いて活動は1:30~15:30に行われた)

回	日時	場所	参加者	活動内容
			婦:帰国者参加者 日:日本人参加者 それ以外はコース運営関係者	
第一回	99.8.2	福島センター	婦: N, U Y, S, K, 筆者	・「サロンコース」実施の打ち合わせ(帰国者に自分の趣味や、特技などについて紹介してもらい、今後どんなことをどんな形でやっていくかについて意見交換)
第二回	99.9.20	福島センター	婦: M, N, U 日: 日中友好協会員 D, E, F Y, S, K, 筆者	・自己紹介 ・グループ別交流「自分のことについて話す」(それぞれに通訳も入る) ・Nさんの発表「飲食と健康」について皆で話を聞く ・次回の打ち合わせ
第三回	99.10.27 10:00 ~ 14:00	郡山婦人会館	婦: M, N, U 日: D, E, F等、他友好協会の方、市民の方10名 Y, S, K, 筆者	・日中友好協会主催「薬膳料理講習会」に参加する ・MNさん 薬膳お粥と中華サラダを作る ・会食 ・Uさん「風邪の予防について」漢方の観点から日本人参加者にアドバイス ・質疑、懇談、参加者(帰国者、日本人参加者)へアンケート実施
第四回	99.11.22	国際交流サロン	婦: U 日: 友好協会E, G / 中国語教師 H Y, S, K, 筆者	・今までの活動についての感想会 ・地元の公民館活動を紹介(興味を持ってそうな講座やサークルがあるか資料をしてみる) ・近くの老人福祉センター見学(囲碁クラブの活動と施設見学)
第五回	99.12.20	福島センター	婦: U, U夫人、 M, N 日: E	・地元の公民館活動参加について検討(帰国者が参加してみたい講座を決める) ・参加の段取りを決める

			Y, S, K, 筆者	・Nさんは「香功」を教えられるとのこと。公民館で「香功」講座が開ける可能性について話し合う
第六回	20.1.24	福島センター	婦: U, U夫人、 M, N 日: E Y, S, K, 筆者	・公民館活動の参加報告と感想会 ・Nさんから、「香功」の説明と実演あり。次回はNさんの地元の公民館に交渉に行くことを決める。
第七回	20.2.22	S公民館・他	婦: N 日: E Y, S, K, 筆者 S公民館職員の方	・Nさんの地元の公民館に「香功」講座開講の可能性を探りに行く。
第八回	20.3.27	福島センター	婦: U, U次女 日: E Y, S, K, 筆者 Yさん後任Zさん	・今年度のサロンコースについて感想を聞く。 ・今後のことについて話し合う ・中国の歌、日本の歌を皆で歌う

(資料3)参加者アンケート

3回目後アンケート(帰国者参加者向け 以下の内容の中文版を使用)

[感想アンケート] (氏名)

今日の会に参加していかがでしたか?今後の活動の参考としたいので以下のアンケートにお答えください。

1.今日の会に参加していかがでしたか?(いずれかに をつけてください)

- ・とても楽しかった
- ・楽しかった
- ・まあまあ楽しかった
- ・あまり楽しくなかった
- ・つまらなかった

2.今日のような会がまたあったらまた、参加したいと思いますか

- ・是非参加したい

- ・都合が付けば参加したい
- ・内容による(どんな内容?)
- ・あまり参加したくない

3. 今日の会はあなたにとってどんな意味や発見がありましたか。

- ・日本人との交流をもて嬉しかった
- ・自分の知識や技術が役に立って嬉しかった
- ・人前で話をするのが恥ずかしかった
- ・人前で話をするのが楽しかった
- ・日本人の興味が少しわかった
- ・知り合いができて嬉しかった
- ・あまり、意味や発見は見いだせなかった
- ・その他()

4. 今後のサロンコースでどんなことをやってみたいですか。(該当するものに をつけてください。複数可)

- ・今回のような講座の講師役をやってみたい
- ・少人数で日本人と直接交流してみたい
- ・自分と共通の趣味を持つ日本人と一緒に活動してみたい
- ・中国語のできる人と話してみたい
- ・日本人の同年代の人たちがどんなところで、どんな楽しみを見つけているか知りたい
- ・自分のことを表現する日本語をもう少し勉強したい(自分のペースにあった方法で)
- ・帰国者仲間が集まっておしゃべりする場が欲しい
- ・その他()

5. その他、今日の講座についての意見、感想を書いてください。

6. サロンコースについての意見、感想を書いてください。

3回目後アンケート(日本人参加者向け)

[参加感想アンケート]

本日は、「中国家庭健康料理」の会にご参加くださり、ありがとうございました。今後の

活動の参考と するために、以下のアンケートにお答えください。

1. 今日の会に参加していかがでしたか?(いずれかに をつけてください)

- ・とても楽しかった
- ・楽しかった
- ・まあまあ楽しかった
- ・あまり楽しなかった
- ・つまらなかった

2. 今までに中国の人と接したことはありましたか?

- ある・ない

3. 中国帰国者の方々について、どの程度ご存じでしたか。

- ・全く知らなかった
- ・テレビや新聞で見る程度
- ・帰国者関係の本を読んだことがある
- ・近所に帰国者の人がいる
- ・帰国者の知り合いがいる

4. 今日、中国帰国者の方々に会われた印象はいかがでしたか

- ()

5. 中国に関して興味があるものがありますか。(あてはまるものに をつけてください。複数可。)

- ・特にない・中国語・太極拳・料理・水墨画・気功・京劇・その他

6. あなた自身の趣味は何ですか。

- ()

7. 今後も中国帰国者の方との交流をしてみたいと思いますか。

- ・是非してみたい
- ・都合がつけばしてみたい
- ・企画によって参加してみたい
- ・ちょっと難しい

8. 差し支えなければ、ご連絡先をお書きください。

氏名:

住所: 〒

電話：

9. その他、ご意見、ご感想をお書きください。

ご協力どうもありがとうございました。

コース修了アンケート(帰国者参加者向け 以下の中文版を使用)

サロンコースの皆さん、去年の8月から始まったサロンコースも、3月で一つの区切りをつけたいと思います。今回参加して下さった皆さんに、試行錯誤だったサロンコースの感想と意見を最後にお聞きかせください。4月からも続けてサロンコースを実施していけたらと思いますが、どんな形のコースがいいか考えるためにも、皆さんの意見を参考にさせていただければと思います。以下のアンケートにご協力ください。

1. 今回のサロンコースに参加してどうでしたか。以下、あてはまるものに一つ をつけてください。

楽しかった。

まあまあ楽しかった。

回によって楽しかった。

あまり楽しくなかった。

楽しくなかった。

2. 1で に付けた方、どんなことをやったことが楽しかったですか。

()

3. サロンコースに参加して得たものがありますか(今まで知らなかったことや新しく気づいたこと等)

いろいろあった

少しあった

特になかった

4. 3で につけた方、どんなことが得られたと思いますか。具体的に書いてください。

()

5. 今回のサロンコースに参加したことにより、以前よりは日本人と交流できるという自信がつけましたか。

・ ついた

・ 少しついた

・ あまり変わらない

・ その他()

6. 今回のサロンコースに参加して、以前より自分自身を表現する機会を得られたと思いますか。

・ 思う

・ 少し思う

・ あまり思わない

・ その他()

7. 孤児世代、或いは、帰国時の年齢が比較的高い年代の帰国者にとって、地域社会(日本人)との関わりの場は必要だと思いますか。以下、あてはまるものにつけてください。複数選択可。

・ 是非あった方がいい。

・ できればあった方がいい。

・ 家族間の行き来があれば、それ以外にはあまり必要はない。

・ 家族と帰国者仲間とのつきあいがあれば、それ以外にはあまり必要ではない。

・ 中国語のできる少数の日本人とのつきあいができればそれでいい。

・ その他()

8. 地域の日本人との交流は、どんな要素があれば可能だと思いますか。(複数選択可)

・ 自分の興味のある趣味の場や交流の場の情報が得られれば可能

・ 自分の興味のある趣味の場や交流の場に日本人が誘ってくれたら可能

・ 自分の興味のある趣味の場や学習の場に中国語のできる日本人が誘ってくれたら可能

・ 隣近所の人と仲良くなるきっかけがあれば可能

・ 団地内の人との交流の場があれば可能

・ その他()

9. 高齢化する帰国者が日本生活に必要なものは何だと思いますか。(複数選択可)

・ 地域の中国人や帰国者同士が集まる場

・ 自分の趣味や学習したいことが行える場

・ 高齢者がゆっくりでも日本語を学習できる場

